

広島藩のお抱え絵師
岡岷山の描いた江戸時代の白井の滝周辺を歩く

今から二百年あまり前の江戸時代後半のことです。
広島藩のお抱え絵師・岡岷山(おかみんさん)は、藩主・浅野重晟(しげあきら)公のお傍近くに仕えていました。
一七九七年の八月下旬(新暦では十月中旬)、許可を得て都志見(つしみ)の駒が滝まで写生の旅を行い、「都志見往来日記」と「都志見往来諸勝図」を提出しました。重晟公が尊敬する祖父の吉長(よしなが)公が整備した、湯の山温泉も旅の目的の一つだったと思われる。
旅の初日は、湯来南高校の近くにあった庄屋、竹内甚九郎の家に宿泊しました。翌日、白井の滝に寄って、おそらく昼には湯の山に到着したと推測しよう。
この周辺では「大森」「白井の滝」「鍋石」と三枚を描いています。なかでも白井の滝は岷山の心に触れるものがあつたとみえて、「芸備諸村瀑布図」にも収録しています。岷山の目に映った江戸時代の風景はどのようなものだったのでしょうか。
さあ、白井の滝周辺を絵図とくらべながら歩いてみてください。



「藝藩通志」(二八二五)

広島藩内を網羅した地誌で、岡岷山の「都志見往来日記」から二十八年後に藩主に提出されました。
藝藩通志は村々から提出された資料をもとに作成され、概念的な絵図が添えられています。
白井の滝コースは、上伏谷村と下伏谷村にまたがっています。そこで、両村の絵図を少し修正してから、結合してみました。上が西になります。赤線の左が上伏谷村、右が下伏谷村です。
地名などは読みやすいように活字になおしました。

「江戸ゆきツアー」のコース

「江戸ゆきツアー」では、岡岷山がたどった行程を五つに分けて、それぞれ半日のコースとして設定しています。二時間の短縮コースもあるので、スケジュールや体力に応じて選択してください。



[発行・お問い合わせ]

「江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみようプロジェクト」

NPO法人湯来観光地域づくり公社

広島市佐伯区湯来町大字多田2545

TEL 0829-85-0670

HP: <http://e-yuki.net> 「となりの里山」

白井の滝コース編

江戸の湯来を歩く

岡岷山の二日目の旅は、上伏谷の庄屋の家から湯の山温泉までです。距離が短いので、この日は余裕のある行程だったと思います。

「江戸の湯来を歩く」

江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみよう

「そこは、荷物を積んだ馬がたくさん通っていました。馬車は通れないので、小道を歩いていると、お年寄りから声をかけられました。」「あの地藏さんの前を通るときには、ちよつと拝んでから通ってましたよ。」「農作業の手を休めたまま、昔の話をいろいろ話していただきました。」

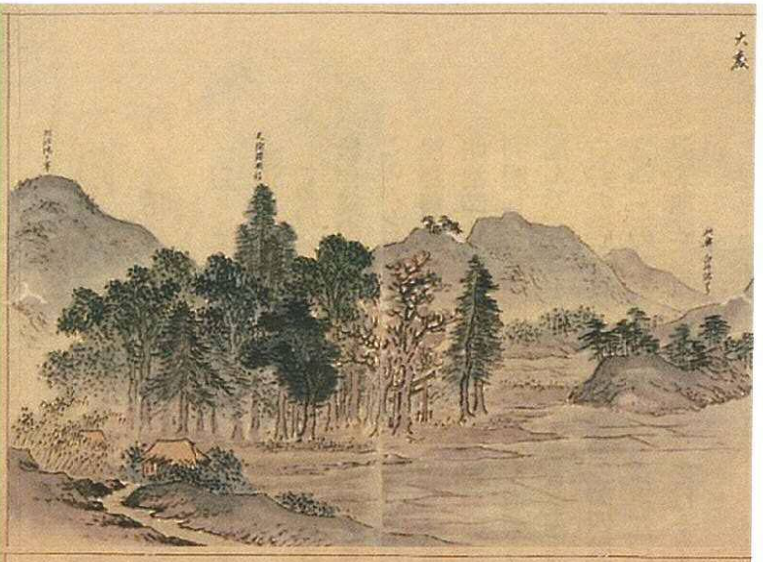
このパンフレットの作成に使った資料は、「藝藩通志」(一八二五)の絵図や、浅野藩のお抱え絵師、岡岷山の「都志見往来日記」と「同諸勝図」(一七九七)、明治時代の地図、それとこうした地元の高老からの聞き取りなどです。判明した江戸時代から続く古道のうち、楽しく歩いていただける場所を選んだ、五コースのパンフレットを作成しました。

白井の滝コースは、そのうちの第四段目です。さあ、このパンフレットを片手に、江戸時代からの歴史がある、湯来地区の古道をのんびり歩いてみましょう。



Edo Yuki

定価/100円



①大森神社

「先年叡島大鳥居の木をこの森にて七本伐るといえり」と書いている。七年前、寛政式(一七九〇)年の「大鳥居御用木干場所年貢米儀御下願申上書」が残る。大鳥居の主柱はクスノキなので袖柱用の杉材を伐りだしたと思われる。岷山が描いた天狗の腰掛杉は文政十一(一八二八)年に暴風雨で倒れた。その後は、鬱蒼とした社叢に回復していたが、平成三(一九九一)年の台風で壊滅的な被害をうけ、すべて伐採された。

②大通寺

阿弥陀山に寂光院観音堂があった。銀山城の武田氏の代に麓に降りて、奥の「長楽寺」と呼ばれた。銀山城の戦いで武田氏を滅ぼした毛利元就は天文十三(一五四四)年、吉田郡山城にあった菩提寺、大通院を建てて大通寺とした。京都で作ったという大鐘が現存する。

③庄屋敷跡

当時の上伏谷村庄屋は竹内甚九郎。付近の庄屋を束ねる割庄屋であった。地元では屋敷背後の小山を「たげんち山」と呼ぶ。竹内氏は四国の道後出身で河野氏の末裔と伝える。当主は代々、甚九郎を襲名することが多かった。延享二(一七四五)年には「庄屋甚九郎」が大森神社に大般若経二巻を寄進した記録が残る。また、吉長公が湯の山神社に参拝した寛延三(一七五〇)年の記録にも「湯所元々、上伏谷村庄屋、甚九郎」の名が見える。さらに、甘日市市(当時白砂村)の極楽寺境内に建つ宝篋印塔銘文にも「文政三(一八一〇)年、割庄屋上伏谷竹内甚九郎」と刻んである。この七五十年間にも世代交代があったと思われる。

④八王神社

地元では「やつおさま」と呼ばれる。元は東側の小さな谷の対岸にあった。昔、提灯をならべて土地の高低を見定めて水路を作り、その水で伏谷郷を拓いた八人の兄弟を祀ったといわれている。各地にある八王子神社や八王神社は、祇園精舎の守護神である牛頭天王(こずてんおう)と沙羯羅(しかつらかつら)龍王の三女婆利采女(はりさいじよ)との間に産まれた八王子を祀る。また、素戔嗚(すさのを)と天照大神(あまてらすおみかみ)の宇気比(うけひ)によって産れた三女五男ともいう。この三女のうち、市杵嶋姫は叡島神社の主神である。なお、藝藩通志には「ゴツ」の地名がある。牛頭と関係するのかもしれない。

⑤白井の滝

「しろい」と読むことが多いが「しろい」と呼ぶこともある。岷山はこの滝がよほど気に入ったのであろう。「芸備諸村瀑布図」(制作年不明)でも描いている。二十年ちかく前の天明元年(一七八一)に藩主重晟(しげあきら)公の命で「東部諸郡村瀑布図」を描いているので、藩全域の瀑布図も描きたかったのだろう。なお、白井の地名は、阿弥陀山の西側山中にあって「しろい」と呼ばれる。別に、湯来冠山の南にも白井田原があって、日入谷(ひのいたに)善福寺はこの場所にあったといわれる。また白井姓の家も複数ある。広島の歴史では、千葉氏の末で武田氏に付いた府中白井氏、後に大内についた仁保白井氏が知られる。これらの白井と白井の滝との関係は不明である。

⑥大伴神社

神社の祠には山の神を合祀して、地元では「おおばんさま」と呼んでいる。岷山は「大森神社の東、少し小高い場所にも森があって、大森の山の神を祭っている。祭りは三年に一度、九月二九日。ワラで大きな龍の頭を作ってカツラの木に縛っておく」と記す。今は該当する祭りやカツラの木はなく、言い伝えもない。ワラで作った龍や蛇を巻く神事は境港市日御崎神社や岩国市山代地方の神社などに伝えられている。近くでは、白砂字大山の八雲神社で神木のヒノキに龍頭の注連縄を張る。なお、「大伴」は方角の吉凶を司る八将神のひとつ「黄幡」を意味し、「黄幡神社」と書く文献もある。

⑧大野地蔵

地蔵の前を通る古い道は石州往還、大田往還とよばれていた。山縣郡や遠く浜田までつながるので往来は多かったという。地蔵はこの道沿いに来て人々を守ってきた。荷物を積んだ馬が行き交っていたが、伏谷川沿いの自動車道ができてトラックやバスにかわった。

⑨鍋石

川底の堆積岩にある罅穴。鍋石と釜石がならび、鍋石の横に大杉(弘法杉)があった。下流側に叡島明神を祭る鍋石明神社(岩清水社)があり、岩肌から清水が湧き出ている。岷山は、鍋石図の中に、明神杉・釜石・明神ノ杭石・駒ノ蹄跡・叡嶋明神・眼洗水などの注を書き入れている。しかしなぜか鍋石の注記はない。また、雨乞いの風習も紹介している。蓑笠を被って「大雨じゃ。やれウルサ、やれウルサ」といって罅穴を洗うと雨が降るといふ。

江戸のり、湯来を歩く



寛政九年八月二十四日(一七九七年十月十三日)、二日目の朝を小伏原でむかえた岷山は、目的地の一つ湯の山温泉を目指した。この日は、湯の山温泉に入浴したあと、たらたらと湯まで写生に出かけているので、昼には湯の山に到着したと思われる。湯の山までの道中、大森、白井の滝、鍋石、堂原と水内の左半分を描いた。なお、白井の滝とたらたら湯は芸備諸村瀑布図にも載せている。

白井の滝コース

【2時間コース】大森神社周辺をゆっくり散策するコースです。地元の人しか通らない裏道もあります。きつと新しい発見がありますよ。

①大森神社

④八王神社

⑤白井の滝

⑦茶屋が原



八王さまの森
大伴さまの森
大森神社の東にも森がある



大野地蔵
至 玖島



茶屋が原からの眺望
七茶屋が原
昔、峠の茶屋があったと言われている。吉長公が湯の山温泉を改修した後に訪れた国学者・渡辺正任は、寛延二(一七四九)年の水内紀行の中で、「社の傍なる森の中で、茶店多し、餅・酒よりのものうる」と書いている。岷山も白井の瀧を見た後、この茶屋付近で周囲の説明を受けたのだらう。右は高島山、左は大野地山、その下を大野地原という。正面には湯の山の峰が見える。上伏谷の地はとても標高が高いので、水はここで南北に分れて流れている」と日記にはある。

